別紙１

論 文 審 査 の 要 旨

報告番号	乙 第 2857 号	氏 名	大歳 晋平
論文審査担当者	主査 小林 真一 教授 副査 小風 暁 教授 副査 中館 俊夫 教授		

（論文審査の要旨）

薬疹の原因薬物を同定する検査法の１つにパッチテストがあるが、１施設での長期間にわたるデータ解析の報告はない。
そこで今回薬疹の原因薬同定におけるパッチテストの有用性を検討した。

1990 年 4 月から 20 年間に昭和大学病院附属東病院皮膚科を受診し、薬疹が疑われパッチテストを施行された 444 名（男性 151 名、女性 293 名、平均年齢 49.9 歳）を対象とした。試薬は背部健常皮膚に 48 時間貼布した。
判定は貼布後 48 時間、72 時間に ICDRG 基準にて行い、72 時間後に（＋）以上を陽性とした。

陽性反応は 444 名中 100 名（22.4%）に認められ、臨床型別の陽性率は薬剤性過敏症症候群 56.3%、丘疹紅斑型 23.6%、固定薬疹型 20.0%の順であった。また薬剤別に陽性者数・陽性率が大きいのは造影剤（53 名・41.1%）、次いで中枢神経作用薬（18 名・28.6%）であり、このうち抗けいれん薬が 16 名・41%（カルバマゼピン：12 名）と高率であった。
本研究によりパッチテストは薬疹の被疑薬物が造影剤や中枢神経作用薬、特に抗けいれん薬の場合、原因薬同定に有用な検査法であることが明かにされた。この点において新しい知見を得ており学位論文に値すると判断された。

論文題名：Utility of patch testing for patients with drug eruption
（薬疹患者に対するパッチテストの有用性の検討）
掲載雑誌名：Clinical and Experimental Dermatology 39 巻　2014 年掲載予定